

優 秀

「障害＝マイナス」って、誰が決めたの？

相模原中等教育学校

1年

前田まえだ

千真ちまき

大学に通っていた母のインクルーシブ教育の授業の関係から、僕は、障害があり車いすで生活している人たちの、ダンス教室に、母と一緒に参加したことがありました。

僕はダンス教室づくまでは、「障害がある方の集まりは、あまり明るくないのではないか」という気持ちがありました。それどころか、家を出るまでは、そもそも「どうしてそんなところに行かなければいけないんだ？面倒くさいから行きたくない」とすら思っていました。でも、結局母に連れられて行くことになりました。

2時間後、ダンス教室に到着しました。そこには、想像していた通り、車いすに乗っている方が、たくさんいました。しかし、僕の想像通りだったのは、そこまででした。

少して、教室が始まると、教室は最初から音楽を流して、「自由に踊ってください」というものでした。しかし、僕は先生が、1つ1つの動きまで細かく解説して、みんなと同じ踊りをするものだと思っていたのでとてもとまどいました。

しかし僕は、このあともすごい衝撃を受けることになるのです。というのは、僕は、知らない人たちの前で、自分で考えた踊りを踊るなんて笑われてしまいそうで、恥ずかしくてできないと思いがながらも、適当に小さな動きで踊っていました。そんな中、ふとほかの人を見てみると、皆僕の想像を超えたダンスを踊っていました。僕にとってのダンスは、マイケルジャクソンとか、アイドルが踊っ

ているダンスのことでしたが、そういうダンスとは全く違う、僕にとって新しいダンスでした。教室に来ていた人たちは、みんな違うところに障害があつて、車いすは動かせるけど、右半身しか動かない人や、腕にも障害があつて、そもそも車いすが動かせない人もいました。その人たちは、自分の障害のある部分を隠そうともせず、それを生かすようなダンスをしていました。もしも僕に障害があったら、この人たちとは違い、不自由な部分を隠すために、今よりもっと小さな動きでしか踊っていなかったと思います。しかし、この人たちは、障害があつても、それが自分である、と、障害があることを自分の個性としてしっかりと受け入れているのです。これは、僕にとって、鋼鉄で頭を思いっきり殴られたような衝撃でした。

それは、「障害があることは、不便でしかない」「障害はただマイナスなだけ」という考えを僕はもっていましたが、この人たちは「障害は個性である」という考えだったからです。

僕がはじめ思っていた、「障害がある方の集まりは、あまり明るくないのではないか」という不安は、教室が終わった時には、完全に消え去っていました。僕があまり明るくないと思っていた理由は、「障害があることを気にしているから」でしたが、全員障害など気にしていない、明るい人ばかりでした。

僕のように、「障害のある人は明るくない」と考え、障害のある人との交流をしない人を減らし、障害のある人だけが浮いてしまう、ということをなくすために、まずは僕から、積極的に困っている方を手伝ったり、交流を増やしたりして、少しずつでも、障害のある人となない人が、平等に、明るく楽しく過ごすことのできる社会を作っていきたいと思います。